伊勢湾台風から50年

特集 - Special Edition -

問 防災安全課 内線272

昭和34年9月26日の夜、潮岬に上陸した台風15号（伊勢湾台風）は、三重、愛知から岐阜、富山を通り日本海へ抜け各地に大きな被害をもたらしました。

今年は伊勢湾台風から50年。今回の特集では、伊勢湾台風によって大きな被害がでた当時の美濃加茂市の状況を振り返るとともに、避けることのできない自然災害について、わたしたちはどのように備えればよいのか考えます。

▲家屋の倒壊現場（古井地区にて撮影）

▲古井連絡所前
暴風雨で倒壊した電柱

▲山之上果樹園
名産の柿や梨は全滅にひんし、大きな損害を出した

▲下米田保育所
暴風雨で板壁や柱などの建具が破損。屋根瓦も多数吹き飛ぶ

▲加茂野町市橋
暴風雨で倒壊した家屋

一晩で変わった景色

「夜が明けると、家の屋根瓦はほぼ吹き飛び、庭木や畑の野菜もほとんど倒れていて、一晩のうちに周りの景色が変わっていた」と、台風直撃当時から太田町の木曽川沿いに住んでいる多治見てる子さん（80歳）は、当時の市内の状況を鮮明に語ります。

一方、山之上町で、農園を営む小藤昭さん（59歳）は、小学生の時に自宅で台風を経験。「父親が雨戸を必死におさえる中、家の中に雨がどんどん入りこみ水浸しになった。翌朝、外の農園を見ると、梨や柿の木になっていた実や葉は、ほとんど残っていなかった」と語ります。

昭和34年9月26日、伊勢湾台風が東海地方を縦断し、各地に大きな被害をもたらしました。

美濃加茂市においても、同日午後9時30分ごろから、市内各地で暴風雨となり、当時の美濃太田駅保線区の風速計は、最大瞬間風速45メートルを記録して壊れてしまうほどでした。雨もすさまじく、26日午後8時～10時の市内の雨